

第五回 電撃hp短編小説賞一次通過

『市立探偵物語』

原稿用紙換算81枚

南皆星達 著

1

貴方は、市立探偵事務所というものを知っているでしょうか。いや、私立探偵ではなく市立探偵、です。

正式名称は市役所市民生活部市民センター出向機関という長つたらしい名前で、その職務は市に対する市民の行政への要望や陳情、助力の要望等……早い話が、市が運営するボランティア機関なのだそうです。

ある時は駅前の自転車整理をし、またある時は独り暮らしの老人宅に将棋を指しに出向き、ついでに迷い猫探しなんかも引き受ける……そんなこんなで付いたあだ名が『市立探偵』という訳なのです。

片腕の所長と髪の毛の長い秘書が、都市で暮らす市民のどんな要望にも無償で応えてくれる。それが例え、人智を超えた怪異の解決であつても。

しかも、どの都道府県、どの市町村にも必ず一箇所は設置されているそうですが、何故かその存在を正確に知っている人は殆どいません。

そう、まるで都市伝説みたいに、誰もが知っているのに、何処にも記れていない……それが、市立探偵事務所。

これは、私の友達の友達が経験した本当の、話です……

2

『大学生足無し死体で発見』

この見出しが紙面を飾ったのは、8月14日の事であつた。

何でも、大学生が自宅で足が無い状態の死体で、バイト先の先輩に発見された……というのが大まか記事の内容であるが、この記事には不可解な点が二つほどあると言える。

一つは、余りにも記事の扱いが小さいという事。そして

しかし、雪で線路のみぞがかくれていたため足がみぞにはまり、足をくじいてしまいました。

彼女は必死で逃げようとしたがよけきれず電車に引かれてしまいました。

体は胸のあたりでちょうどきれいに真つ二つになりふうなら即死でした。

しかしあまりの寒さで血管が一時的に固まったため、即死ではなく数分だけ苦しみながら生き続けることができませんでした。

彼女は腕を立てて這う様に踏切の外にでました。

意識が無くなっていく中で最後まで苦しんで彼女は息をひきとりました。

そして、彼女は死ぬ寸前までばらばらになった自分の下半身を探していたそうです……。

そして数年が経ちました。

当時のクラスメートの男子がああ歌をおもしろがって作りました。

女子は、すごく怒ってやめさせましたが男子はそれを聞かず歌をどんどん広めました。

しかしその3日後男子二人は、足のない死体となって発見されました……。

さてあなたもメールを読んだからにはただではすみません。

44時間以内に5人の人にこのメールを送ってください。最近いたずらメールが流行っていますが、このメールはまじでヤバイです。

だから強制はしませんが、なるべく回していただくさい。

二度三度と回って来た場合は、もう佐知子さんに対しては供養をした事になるので大丈夫です。

その時、貴方の足が無事でありますように……。
アタシノアシナイノ。アナタノ、チヨウダイ?

▽ 怖いよ助けて……。

▽ ゴメン……送っちゃった

▽ マジ怖いからごめんね……回すね。

▽ 助けて。お願い……

私 藤堂平太郎がこの奇妙なメールを、小学校からの友人である山邑紅葉から受け取ったのは、今から一週間前の事であった。

はじめてこのメールを見た時は、「あいつの悪い病気が再発したか……」等と、携帯の液晶画面に向かつて嘆息してしまった私であったが、流石にメールを送ってきた紅葉が三日も音信不通になってみると、この文面を見つめる感情も変わってきた。

紅葉の趣味は、どつぶり怪奇現象。

それも夏限定である世の風潮には真つ向から逆らい、一年中オールシーズン背筋を寒くさせていなくては気の済まない様な子なのだ。そんな彼女の興味は幽霊だけに留まらず、妖怪、UFO、都市伝説と、とにかく「怪奇」なものならば、分け隔てなく飛び付いていた。

そんな訳だから、あの手のメールは一時期、よく送られて来ていたのだ。

「届いてから二日以内に三人の人に回して下さい。止めればあなたが犯人であると認識します。」

とか、

「このメールを見たら必ず二十四時間以内に九人に回して下さい。信じる、信じないは自由。私は、本気でとめたやつを自動的に標的にし殺すだけだから。」

なんて、物騒な脅し文句で締め括られている俗に言うチェインメールである。ちなみに、前述したメールは『橘あゆみ』と題されたもので、九十年代末に出回った『アメリカ村』というチェインメールをベースにして模倣された物の一つ……とは、紅葉の言葉である。

その紅葉にはこの手のメールを蒐集する趣味もあり、新種を手に入れると私にもささず送信して来ていたのだつた。「御裾分けだよ」なんて一文を添えて。

彼女とは違い、読書という至ってノーマルな趣味を持つ私としては、これ程までに迷惑な御裾分けもないのだが、いちいち気にするのも馬鹿らしいので、そのメールは誰にも送信せずにほったらかし、

「今度送ってきたら絶交ね。」

という、正真正銘の脅し文句を代わりに送信し返してきたのだが……

「大学に来ていない……の?」

「ええ、そうなんすよ。ちょうど五日前から。藤堂先輩も知らないんすか、部長が何処に行ったか?」

私が更なる不安の種を抱えさせられたのは、それから更に二日後の大学で、である。

「いや、全然。俺はてっきり、また君や林君とか一緒に肝試しにでも出掛けていたと思っていたから……」

妙な不安を覚えた私はその日、たまたま学生食堂で見かけた、紅葉と同じ学部、同じサークルの後輩を掴まえて話を聞く事にしたのだ。

最終講も終わり、既に日は傾きかけていると言つのに、校内は依然として賑やか……いや、やかましかった。これだけ大勢の他人が行き交っているのだから、学部が違つてしまえばもはや偶然に出会う事など殆ど無いのである。それが例え、幼馴染だとしても、だ。

だからこそ、なのだ。

チエーンメールは嫌いだし、チャネリングなんてした事もないし、わざわざ心霊スポットまで行って記念撮影を撮ったり、ダウンジングで埋蔵金を探そうなんて夢にも思つた事のない私が、紅葉が部長を務める『怪奇同好会』なるサークルにわざわざ籍を置いているのは。

「もうすぐ夏休みですからね。そういうイベントを計画してはいたみたいですよ、部長。何でも、良いネタを仕入れたとかで……」

目の前の後輩は、如何にも嬉しそうに話している。彼は、いや私以外のサークルメンバーは当然ながらその手の話題には目が無いのだ。嬉しそうとはいえ、その目は何処か据わつていて少々不気味である。

「……あ。そのネタって、もしかして『サっちゃん』の事?」

「サっちゃん……って、あのサっちゃんっすか?」

どうやら正解では無かった様だが、彼の怪奇同好会としての興味を刺激してしまった事は、間違い無さそうであった。据わつた眼が、加えて怪しい輝きを増してこちらを見つめている。

どうしたものかな、と内心では少し躊躇したものの、他に手がかりがある訳でもない。

「実はね、こんなメールが紅葉から届いたんだよ。届いたのは、ちょうど五日前でね」

私は自分でも何処か馬鹿げていると思いつつそう前置きをする、長机を挟んで向かい合わせに座る後輩に例の

メールを見せた。

「これ……サっちゃんメールですね。これが部長から？」

「ああ……。あいつからは一時期、こんなメールばかり届いていたんだよ。最近は無くなっただけ……」

「あれ、そうなんですか？ 部長、僕等が頼んでも絶対に送ってくれませんでしたよ、チーンメールコレクション。それどころか、見せてもくれなかったし……」

え、と私は思わず、後輩の言葉を聞き返してしまった。

私はてっきり、紅葉が自分の知り合いにはチーンメールを送りまくっているとはかり思っていたのだから、この驚きは至極当然であった。

「でも、この最後の“助けて。お願い……”って文は、後から付け足されたものですよ。って事は……」

「紅葉がサっちゃんに命を狙われている……なんて言わないでくれよ。君までそんな事を言い出したら、俺は本気であのサークルを辞めたくなる」

目の前で紅葉の身を案じ表情を曇らせ始めたこの後輩は、怪奇同好会の副部長なのだ。紅葉は本当に、色々な意味でメンバーに恵まれている様である。

「それに、だよ。仮に……もし本当に仮として、このサっちゃんに命を狙われているとしたら、ざっと七十四時間は手遅れという事になる」

「そりゃそうっすけど……」

それきり、副部長の後輩は黙り込んでしまった。心霊現象肯定派であろう彼等に見れば、サっちゃんメールの示す、『44時間以内に5人の人にこのメールを送ってください。』は、まさに絶対の死刑宣告に他ならないのだろっつ。

普段、知り合いには決してチーンメールを送らないという紅葉が、私一人にだけ助けを求めて五日前から音信不通……状況のみを並べてみれば、紅葉は既に死んでいる事になる。

「しかし、五日は冗談にしちゃ長すぎるだろうっしね」

確かに紅葉の趣味は悪趣味だが、私を驚かす為に五日も姿を消すほど悪趣味な事はしないのは、幼馴染の私がよく知る所である。

「部長は一人暮らしじゃないですか。実家には……」

「残念だけど、実家にはいなかったよ。無論、あいつの部屋も留守だった。携帯だって、もう発信履歴が紅葉の名前で埋め尽くされる位掛けてみたけど……」

「そう……っすか」

長机の向こうから身を乗り出して後輩も、とうとう所在無き気に身を引つ込めた。結局の所、自分が八方塞であるという現状を再確認したに過ぎなかった様である。

「お手上げてやつだね、これは……」

うなだれる私の手は胸元に伸びていた。煙草の味にこだわらない訳では無いが、私の場合には思案喫煙の部類に入るものだ。敢えてキヤメルを好んで吸う様にしているのは、今は亡き憧れの人が吸っていた銘柄だからだ……等と考えている内にもう、一本啜えている自分に気付いた。

思案に行き詰った脳が、ニコチンを欲しがっている証拠だろう。実際、私は焦っていた。早くしなければ、早く解決しなければ、また……

「藤堂先輩、食堂じゃ不味いっすよ。吸うなら部室にでも……」

「あの部室は、気味の悪いモノで敷き詰められているからもう二度と敷居を跨ぎたくないんだよ。あそこに行く位なら、俺は食堂のおばちゃんの説教を選ばせてもらおうよ」

窓を覆う暗幕、唯一の光源は燭台に並ぶ蠟燭、書棚を埋め尽くす心霊本、床に広がる如何わしい事この上ない魔方阵……。自治執行部に見つかれば確実に廃部に追い込まれるであろう、あの“黒い”部屋には、四月の新歓コンパ以来二度と近づかないと心に誓って

「いや……確かに君の言う通りだよ」

「え？」

「喫煙者はマナーを守らなければならぬだろう？」

私は心にも無い事を言いながら席を立った。啜えただけでニコチンが摂取された訳ではないだろうが、私の脳が、新たな可能性を探し当てたのだ。

(もしかすれば、部室に手掛かりがあるかもしれない)

5

「マトモな灯りもあるじゃないか……」

壁際に這わせていた指が、部屋の蛍光灯のスイッチに触れた事でようやく、私は安堵の溜息と悪態をついた。

あれから副部長の後輩に鍵を借りて、私は一人きりで怪奇同好会の部室へと向かった。

部室棟自体は夜になってもそれなりの賑わいを失わないうが、文科系サークルのエリアにまで足を伸ばすともはやその恩恵にも与れず、辺り一帯が全て怪奇倶楽部の部室では

ないかと思えてしまう程、不気味な静寂に包まれてしまうのだ。

「本当は、一緒に来て欲しい所んだけど……」

チ力チ力と、何度もしばたいてからようやく蛍光灯が部屋を照らし終わるのを待って、私はそろそろと部室へ足を踏み入れた。

隅々まで照らし出された部室は、蝋燭の灯りの様な相乗効果はないが、それでもやはり不気味である事に変わりはなかった。特に紅葉が、いつか髪が伸びますように、と不謹慎な願懸けをして書棚の上に設置した古めかしい日本人形は、どの角度から見てもこちらを睨みつけている様に見える、ハッキリ言って怖い。

(さっさと調べて、退散した方が良さそうだ……)

私は改めて自分自身に言い聞かすと、部屋の入り口を正面から見据える様に配された机へと向かった。学校でもよく見かける　とは言え、さすがに小学生が使う様なあれではなく、職員室に並んでいる様な簡素な事務机である。

今は主を失ったその机の裏に回り込むと私は、懐からおもむろにドライバーを取り出した。

「まさか副部長の目の前で、こんな手荒な真似は出来ないからな」

それはまるで、言い訳みたいだった。

私は左手に握ったドライバーを机の足元にある棚の鍵穴へと突き立てた。

(何か手掛かりがあるとしたら、もうここ位しか考えられない　！)

バキン……ッ！

五発目でようやく、鍵穴が壊れた。

私は堪らず、棚每を引っ張り出すと中身を床へとぶちまけた。途端、幾重にも紙束が雪崩落ちる。ルーズリーフだ。

見慣れた　擦れたみたいに筆力の弱い紅葉が書くのと同じ文字で黒くなっているルーズリーフの束であった。

「何だ、これ……」

あまり期待したものではなかっただけに、拍子抜けしながらも私はその中の一枚を拾い上げて見る。

『背の上の死者』

タイトルと思しきその一行の下には、何行か空けてびっしりと紅葉の文字が綴られていた。その内容は……

『考察：背の上の死者にまつわる説話にある共通点、それは死者を可視出来るのは子供に限られるという点である。』

日本では古来より、七歳未満の子供は人間よりも神に近い存在であるとされており、その為に子供には霊や妖怪、妖精といった神寄りの存在を可視出来るといった俗信がある。

もっともこの俗信の根底には、七歳までの子供は、いつ死んでも不思議ではないという、当時の幼児死亡率の高さがある事は否めない。また、幼児期の子供によく見られる一人遊びの様子が、大人には架空の存在と共に遊んでいる様に見えるという事も、この俗信の一因であると思われる。参考話：ある所に仲の悪い夫婦と、二人の子供が暮らして

と、そこまで読んで私は、思わず紙面から顔を背けた。この話は知っている。

「お父さんは、どうしてお母さんをずっと背負っているの？」

という、子供の一言で終わる、有名な都市伝説だ。

いや、これだけではない。鍵付きの棚に仕舞い込まれていたルーズリーフはその全てが、どれも聞いた事のある様な都市伝説のあらずじと、その現象に対する紅葉の考察が、事細かに記されている。その内容は、まるで……

「レポートじゃないか、これじゃ……」

その文章は、自分の趣味が高じて書き溜めたというよりは、誰か他人に見られる為に書かれたレポートの様な完成度を誇っていた。おそらく、もしも都市伝説論なる講義があれば、紅葉は間違いなく『優』の成績を修められるだろう。無論、そんな講義が在り得る筈も無いのだが。

「……だったら、誰に見せるつもりだったんだ？」

私は、そこで当然の疑問に行き着いた。

見せる相手のいないレポート。そんなものに、どんな意味があるだろうか。鍵付きの棚に仕舞い込む程の価値があるだろうか。

「ん？ これは……」

その時、私は地面に散乱したレポートの中に一枚、異質を発見した。それは、

「表紙……」

紙が黒く見える程に書き込まれた他のレポートとは違い、その紙には『常盤市都市伝説レポート』というタイトルともう一つ、このレポートを見せる筈であったろう相手の肩書きと名前が、浅葱色の罫線の上に行儀良く並んでいた。

「市立……？ 探偵事務所所長……」

「鹿島、零次」

「はい。探偵なんてものをやっていましたね……」

そう答えた探偵は深々と一礼をする。もつとも、頭を下げられた相手 辻占い屋の老婆は、顔も上げずに卓上に鎮座する水晶を眺め続けていたが。

手足の長い男だ。だが、左腕がない。黒尽くめの地味なスーツ姿だ。けれど、着込んでいるカラーシャツは派手すぎる。そんな、探偵だ。

「私立探偵が、私に何の用だい？」

「いえ、市立探偵です。……実はですね、今日は貴方に占いをして貰った方の友人に頼まれて来たのです」

常盤市の中心部、ビルとビルの隙間にすっぽりと収まる様にして、辻占いの老婆はいた。人工物によって造り出された人工的な辻。そこは、現代の境界線。現世と異界とを結び付ける入り口。

「覚えてらっしゃらないですか？ 二週間ほど前に来た、若い女性客です。貴方に、『これから暫らくは、何をやっても上手く行くから好きな事をなさい』と言われた女性ですよ。実は彼女……」

「死んだんだろう？」

鹿島の言葉を遮る様にして、老婆は呟く。年老いた外見にそぐわぬ強い口調に鹿島が口を噤むのを見計らい、

「知ってるよ……そんな事。私がそう言ったのはね、」

「彼女の寿命がもう長くないと視えたから、残された時間を好きなことに使って欲しいと思ってああ言ったのだ……とても、仰るつもりですか？」

「……分かっていいるなら、もつ探偵の仕事はないだろうさ？」

「いやいや、そうでもないですよ」

これ以上話はないとばかりに、手元の水晶に視線を戻す老婆に、鹿島は変わらず淡々とした、それでいて丁寧な口調で続けた。

「死神が刈り取って良い魂は、時期を迎えたものだけです。よ。まだ青い果実を、箸り取ってはいけませんね……」

「！」

それまで表情らしい表情を作ろうとしなかったシワだらけの老婆の顔が、突然に歪んだ。その表情は、驚愕。ある

いは、畏怖。

見開いた双眸で鹿島を見据えた老婆は、
「探偵……。一つ、アンタの運勢も占ってあげるよ。そうさね、健康運が最悪だよ。すぐにでも、大きな怪我をするだろうね。」

その時。死の宣告を告げる老婆の背後、ビルとビルの狭間が作り出した人工的な真暗闇から、ゆっくりと鎌が迫出てくるのが見えた。とても大きな、そう死神が振り下ろす様な大きな鎌が……

「言っただでしょう？ 仕事で来たよ。そんな、手前勝手な占いを聞く為ではなく……。」

それまで風に靡くだけであつた鹿島の漆黒のスーツ、左袖がメキメキと音を立てて膨張していく。まるで、失われた腕が生えてきたかの様に……

「貴方を、殺しに来たんです。」

7

次の日、私は大学を休んで市立探偵事務所へ行くことにした。

誤字ではないかと何度も思ったのだが、レポートの束の中に見つけた市立探偵事務所の所長に宛てた紅葉の手紙を読む事で、この疑問は解決された。

市立探偵事務所とはあくまで通称であり、正式名称は市役所市民生活部市民センター 出向機関で、一応はれっきとした行政サービス機関なのだそうだ。

だが、紅葉の認めたその手紙が読み進めていく内に、私はまた新しい疑問にぶつかってしまったのだ。それは、

「……口裂け女も倒した？」

どうやら所長の鹿島零次なる人物は、一昔前にこの常盤市にも蔓延した口裂け女を倒したという経歴があるらしいのだ。

紅葉は手紙の中でこの事をしきりに絶賛し、あまつさえ自分を助手にして欲しいとまで書いている。そして助手に相応しいかどうかは、同封したレポートを読んで判断して欲しい、ともある。……こればかりは、誤字の一言で片付ける事など到底出来やしない。

「紅葉……頭でもおかしくなったのかな」

私は心からそう思った。

大体、口裂け女というのは80年代に岐阜県で発生し、その後急激に全国に広がった都市伝説であって実在の存在などではない。発生の理由には、当時登下校途中の子供を狙った変質者が急増した為に大人達の作った噂という説がある……と、紅葉自身が同封するつもりだったレポートにもしっかり記されている。

更には

「ない……？ って、どういう事ですか？」

「いえ、ですから、お客様の仰った住所は存在しないのですよ。つまり架空の住所という事です」

接客マニユアルに則った丁寧な言葉使いで二度も否定されると、さすがに受け入れる他なく、私はキャメルを一箱買って礼を言つと、そのコンビニを後にした。

「一体、どうなっているんだ……」

自力での発見を諦め、住所付近のコンビニに駆け込んだまでは良かったのだが、まさかこんな所で壁に行き当たるとは思いもしなかった。

私は気が付くと、買ったばかりのキャメルの封を切り一本吸っていた。

嘘のような経歴を持った男が所長の、デタラメな住所の探偵事務所。そして謎めいた失踪を遂げた紅葉……そこに、確かモノなど何一つない。それはまるで、雲を掴む様に実感のない出来事である。

「……市立探偵なんて、ただのウソなんじゃないのか」

私は紫煙と一緒に、諦めにも似た愚痴を吐き出した。

だが、それは余りにも愚かな現実逃避である。理由は定かではないが、紅葉が失踪した事は事実であるし、何よりもあの事件は

「……ウソなどでは……ありません……」

「え？」

それは、周囲の雑踏に飲み込まれてしまいそうなほど、小さな呟きだった。

「貴方……市立探偵事務所を……探しているのですね」

見ると、いつの間にかすぐ横に女性が肩を並べて立っていた。全身黒尽くめのスーツを着込んだ、若い女性だ。

「あ、はい……貴方知っていますのですか？ 市立探偵事務所を」

「知っているも何も……職場……ですから」

女性はまた、まるで腹話術師の様に殆ど口を動かさずに

小声を発すると、くるりと踵を返して歩き出してしまった。

「え……あ、あの……！」

思わず、母親に叱られた子供みたいにその場に立ち竦んでいた私は、それでもすぐ我に返り、何とか女性の後姿に呼びかけた。

すると、

「……………」

その女性はぴたりと歩みを止めると、機械的な動作でこちらに顔だけを向けてきた。口元を隠すほど伸ばしている黒髪の両房が、動きに合わせて揺れる。

「……………」

「……………」

呼びかけたものの、何故か続ける言葉が出てこない。私は何も喋れず、また何も出来ずに、暫し女性の顔を見つめていた。

日本人形の様に白い肌と顔のラインを覆うほどの長い黒髪、端正な顔立ちの中にある双眸が朧気にこちらを見つめ返している。

美人だ。

彼女を前にして、これと同じ感想を持たぬ人間はいないのではないかと思ってしまうほど、彼女の美貌は際立っていた。だが、それと同時に、

(…………怖い。どうしてか分からないけど…………)

その美貌の奥に、何か鋭すぎる、冷たすぎるものが見え隠れしている様にも思えて仕方なかった。

「…………ああ」

ややあつて彼女はひとつ頷くと、

「申し遅れました…………私…………十三階堂と…………申します」

これまた機械的な動作で僅かに頭を下げて見せると、十三階堂と名乗るその女性はまた踵を返して歩き出した。：

…今のは自己紹介、なのだろう。

十三階堂女史のこの行為は、私の思惑とはまるで違って見て見当違いの様に思えたが、考えてみれば成る程、これから仕事を依頼する者受ける者同士、まずは自己紹介というのは定石であろう。

どうやら見当違いをしているのは、私の方だ。そう思った私は、

「俺…………いや、私は藤堂平太郎と言います」

「……………」

彼女は答えない。自身に付き従う影の様に長い黒髪を揺

らしながら歩いている。

いやそれどころか、スカートを靡かせながら淑々と歩いているのにも関わらず彼女の背中はほとんど小さくなくなってしまっ。

「むう……」

これでも一応は、自己紹介したという事になるのだろうか。

振り向きもせずに行ってしまう十三階堂女史の後姿に小首を傾げながらも、私はその背中を追いかける他なかった。

もし、紅葉の記したであろう手紙の内容が夕子の悪い冗談でなければ、私に出来る事は「こ」までだろう。この先は、私立探偵……いや、市立探偵の仕事だ。

8

「君は、存在させられた存在なんだよ」

「存在させられた……存在？」

「そう。そもそも君の妹が、三姉妹の末妹であるから姉に当たる君が存在させられているんだ。だってそうだろう？ 姉のいない妹はいない……」

「でも私は「こ」しなきゃ、自分を存在証明出来ない！ 切り裂かなきゃ……切り裂かなきゃ……切り裂かなきゃ……」

……！

「なら、私に試してみると良いさ。……もっとも、訊かれるまでも無く私は君が美人だと断言するがね」

「所長……只今……戻りました」

「……ん、ああ十三階堂クンか。おかえり」

唐突に打ち切られた夢を頭に引きずりながらも、所長……鹿島零次は椅子の背もたれから身体を起こして、唯一の部下にして秘書である十三階堂の帰りに手を振って迎えた。市立探偵事務所は、とあるビルの屋上に位置する小さな一室にあった。

さほど広くも無い室内は、その半分以上を応接間としての空間が占めており、残された僅かなスペースには、どつしりと構えた机に、所長のネームプレート。雑然と積み上げられた書類の束に書棚、懐かしの黒電話、そして探偵と……ありとあらゆる探偵事務所の要素が詰め込まれていた。

『』牛の首』に関する文献、見つけてくれたかい？』

「はい……どうにか」

「ありがとう。君は優秀な秘書だよ」

「恐縮です……それと、」

次の瞬間。どうして彼女が、入り口に突っ立ったままであったか鹿島はよく理解したが、これはなかなかどうして一端の探偵である彼にも難問であった。何故なら

「お客様も一人……見つけて……しまいました」

「ど、どうも。はじめまして」

十三階堂が一步進み出ると、その後に続く様に一人の青年が扉の向こうから現れた。随分と緊張している様に見える。まあ、何はともあれ……

「ふふ……本当に君は優秀な秘書だね、十三階堂くん。此処に、お客様を連れて来てくれるなんてね」

鹿島は、実に愉しそうに笑って見せた。

何故なら 今、扉の前で棒立ちしている青年……つまり藤堂は、市立探偵鹿島零次にとって実に三年ぶりのお客様になるからだ。

「恐縮です……では」

全く同じ音量、全く同じトーンで応答を終えた十三階堂は、藤堂を此処へ誘った時と同じくスカートを靡かせ、あつと言つ間に部屋の奥へと消えていってしまった。

「彼女なら珈琲を淹れに行ってくれたのさ。それより、」

呆気にとられてその後を眺めていた藤堂に、鹿島は嬉々として説明すると、

「さ、藤堂君。そんな所で立ち話なんて真似はさせないよ。

こっちに掛けて貰えるかな？」

まるで貴婦人をリードする紳士の様な立ち振る舞いで、藤堂を応接間としての空間に鎮座する革張りのソファを勧める。

「あ、は……はい。では失礼しま って、あれ、どうし

て……？」

「どうして、自分の名前を知っているのか……かい？ それは実に簡単な疑問だよ、藤堂君」

片割れのソファに身体を沈めると、鹿島は組んだ足に一本しかない腕で頬杖を突きながら答えた。とても愉快そうに、

「私が、市立探偵だからさ」

発端もなければ解決もない。在るのはただ、完成された惨劇のみ。

その惨劇の中に凄惨な殺戮の餌食がいれば、その犠牲者は既に存在してはなくてはならない。そう、友達の友達という架空の隣人が。

「君はね、僕に選ばれたんだよ……」

携帯の灯りだけを唯一の光源とした暗闇の中で、男は微笑みかけた。その笑みは、まるで仮面みたいに感情がなく不気味なだけの笑みだ。

「この僕の才能を証明する為の生贄にね。凄い光栄だろ？ そうだろう？ 嬉しいだろう？」

だが、幾ら問いかけても返事は返ってこない。それは相手を縛り上げた上に猿轡を施した、この男自身、承知の事であった。

「……うう……」

後ろ手に縛り上げ、クローゼットの中でまるで衣服の様に吊るし上げられた少女は男の言葉に抗う様に身を捻じらせた。だがそれは、自らの実験に成功を収めつつあり高揚した男の前ではまるで逆効果だった。

「そうかい。やっぱり君も嬉しいんだね、紅葉……ふふふ」
血走った目で男は、縛り上げ吊るしている紅葉の肢体を見上げた。

普段の彼女はスカートをあまり履かないのだが、男に捕まったその日は珍しくスカートだった。紅葉の足元で胡坐をかき彼女を見上げている男の目の前で、彼女の太ももが露わに揺れる。

「ああ……綺麗な足をしているね……すごく綺麗だ……！」

そう言って男は、紅葉の太ももを鷲掴みにした。

柔らかな彼女の肉に、陰湿な五指が食い込んでいく。そして、這う様に弄る様にして、何度も何度も乱暴に撫で回す。

「ううう……」

捕まっつてからもう六日。既に彼女の中には抵抗する意思は消え失せていた。それでも男の手から伝わる、粘りつく様な醜悪な感覚から逃れたくて、弱々しい呻き声を漏らす。だが、涙だけは漏らさない。いや、漏らせない。それは彼女がまだ何処かで希望を捨てていない証拠だと言つ事に、男は気付かない。

「サっちゃんねえ……こっぴつ綺麗な足が、特に好きな

んだよ……」

足元にいる男の声を霞んだ意識の遠くの方で聞きながら、紅葉は希望を託した幼馴染の顔を思い浮かべていた。

へーちゃん……助けて……

10

「おかしい」

それが、珈琲五杯を飲み干す時間を要して藤堂が話した、これまでの経緯。幼馴染の紅葉の失踪、サッチャンメル、後輩との会話、鍵を壊して見つけたレポート……を聞いた鹿島の感想であった。

「おかしい……とは？」

「ふむ……。ま、不可解な点は幾つも見つけたんだが……」

鹿島が腕組みしながら、難しい顔で天井を睨みつける。無論、片腕の彼に腕組みは出来ない。腕組みの様なポーズである。

「そうだね。第一に、君はどうしてここに居るんだい？」

「は……？」

「ああ。いや、言い回しが拙かったね……」

唐突過ぎる問い掛けに首を傾げる藤堂。そんな彼に鹿島は、ちよつと待ったと掌を突き出し、

「つまり私が言いたいのは、どうして君はその失踪した幼馴染を見つける手段として、この市立探偵事務所を選んだのか、と言う事さ。光栄にも依頼を頂いていながら失礼だけど、警察にでも届け出る方が手っ取り早いじゃないか」

「そ、それは……。け、警察は頼りにならない。家出入の届けを出した所で、事件にならなきゃ何もしてくれない。きつと……」

急に早口で捲くし立てる藤堂に鹿島は、ふむ、と大きく頷いて見せた。捲くし立てている様で、その実、自らを追い込んでいるに過ぎない彼を落ち着かせる為だ。

「確かに。警察が本気で市民を助けるつもりなら、今頃は順番待ちの整理券でも配っているだろうさ」

「じゃあ……！」

「ただね。だからと言って、じゃあ市立探偵に頼もう……という答えにもならないだろう？ 事件にならなきゃ動いてはくれない。逆に言えば、紅葉さんの失踪には事件性が無いという証拠じゃないか？」

「……………」

「話を聞く限り。君の行動は冷静の様でいて、その実……とても矛盾している。自らの意思で動いている様で、実際には焦燥感に駆り立てられ走らされているに過ぎない。……だって、そうだろう?」

そこで一度鹿島は、飾り気のないシンプルな珈琲カップ口へ運ぶ。

そして藤堂にも一息つこうと促すが、彼は固く握り締めた自らの拳を凝視して、顔すら上げようとしない。俯いたままのその顔は、十三階堂に連れられて此処に来た時とは別の意味で、強張っていた。そう。それは、恐怖だろう。自身の罪を言い当てられる事に対する、限らない恐怖。

それでも鹿島は、顔色一つ変えずに続けた。だって彼は、限りなく優しく、途方も無い位冷たい人間だから。

「君には慌てなくて良い証拠がある。サッチャんに殺されたなんて妄想を一発で霧散させる、決定的な証拠がある……そう、君自身だ。そうだろう? 君だってメールを回していないのに、今こうして生きているじゃ」

「もういいです! もう止めて下さい……っ!」

ようやく観念してくれたか、そう思い鹿島はもう一度珈琲を口へ運んだ。今度は本当に、自分自身の為に。

「さすがは探偵さんですね……頼んでいない謎まで解決してしまうなんて……。鹿島さんの推理された通り、私はメールを回しましたよ。ええ、サッチャんが怖くてメールを回しましたよ!」

「そうしたら、本当に殺されてしまった。……十三階堂くん、アレ持って来て」

「はい……」

姿が見えないのに声だけが聞こえた。かと思うと、既に鹿島の傍らには十三階堂の姿があった。その胸元に、やたらと分厚いファイルを抱えて。

「ああ、すまないね。それと、申し訳ついでに珈琲のかわりもお願ひ出来るかな? 藤堂君は……はは、珈琲どころじゃないって顔だね」

とびきり不謹慎な笑いを漏らすと鹿島は、まるで卒業アルバムを覗くような面持ちで十三階堂から手渡されたファイルのページをめくっていき、

「あった、あった……この殺人事件。殺害方法や、起きた日時、妙に扱いが小さい所なんかもぴったりだ。この、島田という人に君はメールを送ったんだね?」

ファイルの正体はスクラップブックだった。鹿島が藤堂に

見せたページには『大学生足無し死体で発見』という見出しの小さな記事が切り抜かれていた。昆虫標本を連想させる、整頓されたページに貼られた記事の下には一つ一つに書き込みがあった。その記事の下には、流暢なボールペン字でこうある。

サっちゃんの犠牲者

「こんな事になるとは思わなかった……！ まさか本物のサっちゃんメールだなんて」

「思っていなかったのなら、君はそもそもメールを回したりしなかっただろう。あ、十三階堂クンスまないね。……君には、あのサっちゃんメールを恐れるに足る理由があった。そう、紅葉さんの付け足した一文だ」

「いつもは、あんなモノ付け足したりしなかったのに……今回に限って！」

「でも、この最後の“助けて。お願い……”って文は、後から付け足されたものですよね。って事は……」

「紅葉がサっちゃんに命を狙われている……なんて言わないでくれよ。君までそんな事を言い出したら、俺は本気であるサークルを辞めたくなる」

藤堂の脳裏に蘇るのは、あの時の後輩との会話。

あの時、心霊肯定派に過ぎないあの後輩の前ではおくびにも出さずに振舞って見せたが、この人の前ではとても演じきれそうにない。藤堂はそう思うだけで、全ての弱音をぶちまけてしまいたい衝動に駆られた。が、

「君がここで弱音などあげてしまえば、捕まっている紅葉さんはどうなる？ いやなに、男は泣いたらアカン、なんて封建的な思想の肩を持っている訳ではないさ。涙は、感激の再会まで取っておいた方が良いだろう？」

「そ、それじゃあ！？」

藤堂が、堪らずソファから跳ね上がった。今までの陰鬱とした感情も一緒に吹き飛ばした様だ。鹿島は満足そうに一頻り頷いてみせると、

「ああ。恐らく紅葉さんは、まだ生きている。だが、どちらにせよ急がなくてはならないだろうがね……あ、それと藤堂君。君達の怪奇同好会の会員名簿みたいなものはあるかな？」

「名簿……はありませんが、一応メンバー全員の住所は携帯に入れてあります……」

それは結構、鹿島はそう眩くと珈琲を飲み干しカップを静かに受け皿へ戻した。そして伸びるよつに立ち上がり、「さて、と……。それでは、そろそろ“お仕事”を始めるとしまじょうか？」

11

本当の暗闇とは、街灯が一本もない夜道ではなく、月の無い夜空の下ではないか。バイトからの帰路を踏みしめながら、大浜はふと、そんな事を考えていた。本来の彼は自分がとても大雑把である事を自負するほどで、そんな観照的な考えをする人間ではなかった。

例え、帰り道が不気味なほど静寂に包まれていようが、普段は点いている筈の街灯が消えていようが、バイト帰りに思う事は晩飯と深夜番組について位だった。

「……ったく。林のやつが、あんなメール送ってくるからだ」

誰に言うでもなく、大浜は毒づいた。わざわざ声に出してしまったのは、やはり心の何処かで月も出ていない夜道に怯えているからだろうか。

いや、人は闇を恐れているのではない。闇の、その向こうに息を殺して潜んでいる“何か”を恐れているのだ。そう例えば、サッチャ

「ああ！ 何びびってんだよ、俺は！」

どんどんとネガティブな深みに嵌っていく自分の思考回路を大浜は大声で遮断した。彼の後ろにいる女の子も、近所迷惑だと眉を潜めたであろう。……人間であったなら、だが。

「いつまでも取って置くから気にしちまうんだ。あんなもん削除しちまえば……」

あんなもんとは、林という彼の友人から送られてきた一件のチェーンメールの事だ。最近ではめつきり見なくなつた怪談まがいのそのチェーンメールを、林は随分と怯えた様子で送ってきたのだ。

「悪い事は言わないから、メールを回した方が良い……」。

俺の友達も一人居なくなつたんだよ！」

なんて、煽り文句の実演付きで。

その時は大浜も、

「それを言うなら、友達の友達だろ？ 居もしない架空の奴」

などと言って笑い飛ばしたが、時を追う毎に恐怖という名の腫瘍は彼の心で拡大し続けて行った。過去に受け取ったチエーンメールでは、こんな思いをした事など一度も無かったというのに……。

そんな苛立ちを抑えながら、大浜は携帯を取り出して折り畳みを開いた。あとは、メールを削除すれば……

「あ……」

息が止まった。

たまたま携帯を開いたその時、壁紙にしている水着姿のグラビアアイドルの笑顔の上にデジタル時計が『20:30』と表示されている。

それは、大浜が林からメールを受け取った四十四時間後、サッチャんの処刑宣告のタイムリミットである。が、

「な、何だよ……」

サッチャんなんか来ないじゃないか、そう大浜がはき捨てようとした丁度その時だった

「アタシノアシナイノ。アナタノ、チヨウダイ？」

耳元で囁かれた、幼子の声。

振り向くまでも無く、大浜は絶叫する。腰が抜け、転がる様に這いつくばって逃げる。そこで彼は見てしまった。女の子がいた。

白目を剥いたままの顔は血塗れ。

足元からは壊れた蛇口のように、びちゃびちゃと音を立てて血が滴っている。太股から下がらないから仕方がない。

大きな鎌を揺らめかせている。まるで、柱時計の振り子みたい。ブウウ　ンンン　ンンと、大浜の処刑時刻を報せている。

「サッチャん！？　アアアアアッ！！　来るなアアアアアッ！！」

半狂乱……いや全狂乱で大浜は泣き叫んだ。

立ち上がる事も出来ずに呻きながら這いずって逃げる、何時かの自分を模したかの如き獲物の姿を前にして、サッチャんは何を思うだろう。きっと、何も思いはしない。今の彼女が思う事は唯一……

「アタシノアシナイノ。アナタノ、チヨウダイ？」

そう“お願い”をすると、サッチャんは手にした大鎌を夜空に大きく振りかぶった。サッチャんに、意思などない。ただ足が欲しいだけ、ただ鎌を振り下ろすだけ。

ブウウ　ンンン　ンンン！

「ヒイヒイヒイッ！！」

そこで、大浜の意識とケモノじみた叫びが途切れた。
足を切り落とされた……

12

「ふむ。確かに、四十四時間後……時間ぴったりだ」

無遅刻無欠席を褒める先生の様な感嘆を鹿島が漏らしたのは、大浜が足を切り落とされた……と、思い込み気絶してから、すぐの事だった。

「だがね、桐谷佐知子君。仕事というものを完璧にこなしたいのなら、五分前行動の徹底をお薦めするね？ そうすれば……」

今度は、チャイムが鳴っても席に着かない子供を嗜める様にして、鹿島はサッチャーン……いや、桐谷佐知子に肩をすくめて見せた。その肩の先、在る筈のない左袖の中身が、膨張している

ブンッ！！

刹那、サッチャーンが大鎌ごと横薙ぎに吹っ飛んだ。

寸での所で、大浜に振り下ろされた大鎌を受け止めていた“何か”が、今度はその鎌を振り払ったのだ。

「……私の様な邪魔者が来た時にも冷静に対処出来るだろう？」

「か、鹿島さん。アレ、ほほほ本物の……！」

それまで、鹿島の後ろに隠れたまま声を殺して一部始終を目撃していた藤堂が震える声で訊ねる。

これは、あのサッチャーン……都市伝説の存在であるサッチャーンの凶行を止めたばかりか、あまつさえ彼女をブン投げたという彼の暴挙に対しての驚愕であったのだが、案の定、当の本人にはその常人的なニューアンスは伝わらず、

「はは、今更何を言っているんだい？ 流石の私も罪もない一般市民をブン投げるなんて暴挙はしないさ。市立探偵にとつて全ての常盤市民は、大切なお客様であり依頼人なんだからね？」

等と肩をすくめながら、続けた。

「大体、あんな大鎌を背負っている子なんて、サッチャーン以外には死神くらいしか……」

と。そこで、俄かに言い淀んだかと思うと、

「ああ、いやいや待てよ。そう言えば死神は三年前に殺したんだっただなあ」

一人で納得していた。

そんな彼の背中を見つめている藤堂は今までの過程を全て考慮しても、到底彼を理解し得なかった。

「まともに理解するには、鹿島零次というこの男は出鱈目過ぎるからだ。」

「あの、さっきのつて鹿島さんがやったんですか？」

「そりゃそうさ。私に是を与えた……という表現は適切でないかもしれないがね、まあ結果的に与えた奴が言つには、この腕は在り得ないモノを掴む事が」

「ガキイイイイッ！！」

「……出来るんだそうだ。ホラ、こんな風にね？」

突如起こった出来事　サっちゃんが大鎌を振るつて襲つてきて尚、鹿島はそれを淡々と対処しながら説明を続けた。彼の言葉を借りれば……在り得ないモノを掴むが出来る、在り得ない左手を使つて。もつとも、説明を受けている藤堂は、それ所ではなかったが。

「アタシノアシナイノ。アナタノ、チヨウダイ？」

「はは、生憎と足の余分な持ち合わせはないんだ。他を当たつてくれると助かるね」

サっちゃんの大鎌と鹿島の在り得ない左手が、ギリギリと鏝迫り合う。

片や純然たる恐怖と死臭を漂わした少女、片や平然たる態度と余裕と漂わせる青年との鬨ぎ合いは、されど勝敗に生死の直結した紛う事なき殺し合いであった

「ベキイイ……ン！！」

先刻から乱され続けているの寂々とした暗闇に、一際鈍く鋭い破壊音が響き渡った。勝敗が決したのだ。

重力に従い砕け落ちた大鎌の刃を空き缶の様に蹴遣りながら、同時に鹿島は膨張した左袖をサっちゃん目掛けて突き出す。

「ア」

「一瞬。」

藤堂は、異形が怪異に遭遇した時に漏らすという、非常に稀有な呟きを耳にした。

「バアアアアッ！！」

それは、渾身の左ストレートであった。

鹿島の、在り得ない左手のその拳がサっちゃんの蒼白の顔面にめり込み、殴り飛ばす。

実体がないからか、数メートル先の地面へと音もなく叩き付けられたサっちゃんは、やがてのっぺりとした闇に飲み込まれる様にして消えていった。

ただ一言、
「アタシノアシナイノ。アナタノ、チヨウダイ？」
と、決まり文句を残して。

「やれやれ……因果な仕事だね。魑魅魍魎の類とは言え、
女子供に手をあげなくちゃならないなんて……あ、そう言
えば藤堂君は法学部だったよね？」

「へ……？ あ、はい……それが何か？」

消え行くサッチャンを見届けていた鹿島は、苦笑面で振
り向くと、

「こついう場合、正当防衛と幼児虐待はどっちが先に適応
されるのかな？」

「……………」

「あれ、面白くないかい？ 笑えないかい？ 会心の
ジョークだったのだがね」

「わ、笑える訳ないでしょう！ それより、もう一人の所
に向かった方が良いんじゃないですか！？ 今だって、完
璧に倒した訳ではないのじゃない？！」

もう一人とは、高木信二。

藤堂は全く面識のない他人である。ちなみに言えば、大
学も違う。

あの後。藤堂がメールを送った五人の内、生き残った藤
堂の友人に、チェーンメールを送った相手の中で、サッチャ
ンなんて言う都市伝説の類を絶対に信じようとしない人間
がいないか訊いていったのだった。

そこで浮上したのが、今まさにサッチャんに襲われてい
た大浜とその高木信二の二名であったのだ。

「いや……。元々実体のない存在だからね、彼女は。今更
ノコノコと助けに向かった所で、後の祭りというやつさ」

「じゃ、じゃあ……高木信二は、もう……………」

一気に血の気が引いていくのが一見して分かる程に藤堂
は青ざめた。もはや、友達の友達という疎遠での犠牲者で
あるが、それにしても藤堂は決して笑える様な心境ではな
かった。間接的とは言え、自分のせいで人が死んでいく……

……

「安心しなさい」

「え……………」

「もう一人の方には、十三階堂クンに行って貰っているか
らね」

「ひ、秘書さんで大丈夫なんですか？」

「はは……。目には目、といった所かな」

「……？ それってどういう」

ピリリリリ……

「ほら？ 噂をすれば何とやらだ……もしもし、十三階堂クン？ そっちはどうだい？」

うんうん、と何度か相槌を打ってから、鹿島は藤堂の食い入る様な視線に気付く。片腕の鹿島は肩で携帯を耳元に固定すると、左手で親指を立てて見せた。

「……やはり其処か。分かった、今すぐに向かうから十三階堂クンは外から見張っていてくれ。じゃあ」

片手で器用に携帯を閉じ胸ポケットに仕舞いこむと、鹿島は藤堂に向かってにやりと笑い、高らかに宣言した。

「さあ、そろそろ解決篇にでも突入しよう……！」

今度こそ藤堂は笑顔で応えた。

13

法戸忠司は、クローゼットの前に立っていた。

その中にはとても良いモノが入っている。

ペットを躡けるには、些か古典的であるが、ごちそうを鼻先にぶら下げるのが一番である。

これは、まさにそれだ。本来ならただ求めるままに、足を欲しがる彼女を躡ける為に、このクローゼットの中にいる“ごちそう”で釣る。そして、僕にとっても“ごちそう”である彼女……山邑紅葉は本当に、とても良いモノだ。

「さあて……今日は少し、僕が味見しておこうかな」

法戸は堪え切れない笑いに口元を歪ませながら、クローゼットに手をかけた。と、

ピンポーン！

場を白けさせかねない機械的な呼び鈴の音が、部屋中に響き渡った。誰か来客の様である。来客？ こんな夜遅くに一体誰だ？ ……等と考えている間にも、来客はチャイムを鳴らす手を休めなかった。

ピンポーン！ ピンポーン！ ピンポーン！

(チツ……！ 誰だっつんだよ、こんな夜更けに……！)

「はいはい！ 今開けるから……」

苛立ちを隠しきれずに声を荒げながら、法戸が玄関に向かった丁度その時であった

バアアアンツ！

「そこまで手間取らせはしないよ、法戸忠司君。もう、開

けさせて貰ったからね……」

蝶番やらネジやらチェーンロックと一緒に、アパートの扉が吹っ飛んだ。そしてその倒れた扉を踏みつけながら、一人、片腕の男が無遠慮に敷居を跨ぐ。扉を壊しておいて、無遠慮も何も無いだろうが。

「御初にお目にかかる。市立探偵事務所所長の鹿島零次……」

「……」
「その……秘書の……十三階堂です」

然も当然の如く土足で上がり込んで来た鹿島零次は、軽く会釈をした。別の声が出たような気がしたのでよく見ると、鹿島零次の傍らに女が……やはり土足で立ち入っている。

法戸は余りにも大胆すぎる探偵の登場に、当然といえば当然ながら気圧されつつも、

「……誰に依頼されて来たかは知りませんが、通報されたくなければ今すぐに修理費を残して立ち去るんだな。私立探偵さん」

状況に流されず、毅然にも鹿島を睨み返している法戸。だが、

「いやいや、市立探偵だがね……それよりも、通報して困るのは君の方じゃないのかな？何たって、女性を一人クローゼットに監禁しているんだからね」

「なっ……！！？」

こればかりは、今まで平静の仮面を被って来た法戸も動揺を隠し切れず呻いた。何故、紅葉の事を……？しかも、クローゼットの中とまで……？

「所長……いらっしやいました……紅葉さん……」

「え！？」

ガチャリ、というクローゼットの開く音に法戸が勢い振り振ると、いつの間にか十三階堂がクローゼットの中にいる紅葉を助け出しているではないか。その手にした鎌で、紅葉を拘束していた麻縄を斬り落としている……鎌？

「隣の部屋で聞いてみたのさ？ 昼間……例えば、大学生が学校に行っている時間帯で、隣から何か物音がしないか……とね。案の定、六日ほど前からクローゼットの位置にある壁を叩く音が聞こえるという、期待通りの回答が得られたよ……」

「……そうか。お前等、藤堂に頼まれて来たのか……！」

「残念ながら、探偵には守秘義務というものがあってね。

依頼主の名は死んでも明かせないね」

「じゃあ、死ねよ」

吐き捨てる。化けの皮が剥がれた、本性の法戸が。その手には携帯が握り締められていた。

「アタシノアシナイノ。アナタノ、チヨウダイ？」

鹿島が死の宣告を囁かれると同時に、彼の足元で風が起こった

ヒュンッ！

だが、鹿島の胴と足とが泣き別れる事はなく、その長身を誇る体軀は軽やかに大鎌の兇刃を飛び越えて見せた。

「可哀相に。未熟な主に創られたばかりに、こんなにも…弱い。きつとオリジナルは、こんなものではないのだからがね」

「お、お前！ 何なんだよ！？ それに、どうしてその事を」

「法戸…のりと…祝詞。言霊師の家系だろうが、こんなくだらない遊びをしているのだ。大方、没落した取るに足らない一族なのだろう…？」

「黙れ！ 僕の才能は本物だ！ 殺れ、サッチャーン！！」

激昂した法戸の携帯が、再度鹿島を差し示した。獲物を示された獣が、大鎌の牙を揮わんと血塗れの肢体を踊らせる！

「アタシノアシナイノ。アナ」

と、そこで言葉が途切れる。

無理もない。頭を握りつぶされてしまったのだから…

「ひ、ひいいいいっ！！」

鹿島の在り得ない左腕がサッチャーンの頭を握りつぶしたのだ、という事実はまだ理解が及ばずとも、法戸は際限なき恐怖の光景に立ち竦むしかなかった。気付かずに、その手から携帯を落としながら。

「対抗神話というものを知っているかな、法戸君？ 都市伝説を打ち消す為に広まり始める都市伝説…それが、対抗神話」

崩れ落ち、動かなくなったサッチャーンに一瞥くれてから、鹿島は法戸に振り向いた。その顔は、扉を吹き飛ばして入ってきた時と変わらず、実に穏やかなものであった。

「その中でも私は、とびきり強力だね？ 全ての都市伝説と拮抗する為に存在している、人々の恐怖心のブレーキの様な存在らしい。許容範囲を超える恐怖の対象を抹殺する使命があるんだそうだよ……」

鹿島はまるで、昔読んだ物語を回想している様に続けた。

「光ある所には闇があるんだ。人が自然物を凌駕した都市にだって、闇の眷属たる恐怖は必要なのだろう。だがね……」

鹿島が一步、また一步と法戸に近づいていく。法戸は動くことが出来ない。目も耳も脳も、何故か無気味なほど研ぎ澄まされ、目の前にいる真の恐怖を全身で享受させられていく。

「君の行為は無粋だったね。本当の都市伝説とは、止める事の出来ない悲劇なのだよ……忘却という終焉が訪れるまで回り続ける輪廻の輪だ」

その時。バキッ……と、何かを踏み潰した音がその場に足のついた現実へと引き戻した。見れば、法戸の落とした携帯を鹿島が踏み潰していた。

「おっと、失礼。ついつい昔話に夢中になって……」

鹿島の避けた足元には、「こなこなに砕けた携帯の姿があった。再起不能は必至であろう」

「あ！ あああああ！？」

突如、泣き叫びながら法戸が携帯の残骸に飛びついた。

肝心な事を思い出したのだ。その携帯がなければ……

「最後にもう一つ。中国の昔話だが、君に聞かせよう。ひよんな事から呪文の本を拾った男が、式神で金儲けしようとして墓場に行ったんだ」

ブウウ　　ンンン　　ンンン

まるで蜜蜂の唸る様な音が響き始めた。もともと、その音は蜜蜂の羽音なんて可愛いものじゃない。

「男が呪文を唱え始めると死霊が集まり始めた。この調子で行けば上手く行く、男がそう思った矢時に突風が吹いて本が飛んでいってしまった」

頭がグチャグチャに潰れた女の子がいた。

足元からは壊れた蛇口のように、びちゃびちゃと音を立てて血が滴っている。太股から下がないから仕方がない。

大きな鎌を揺らめかせている。まるで、柱時計の振り子みたい。ブウウ　　ンンン　　ンンンと、法戸の処刑時刻を報せている。

「途端、死霊達は元に戻って、その男を呪い殺した……という昔話だ。今の君にはピタリだろう？」

携帯によってサッチャーンという言葉霊を媒介させ、実像幻想の殺人鬼を創り上げたのだ。その携帯を失えば、コントロールの切れたサッチャーンは……

「あ、ああ……来るな……！　来るな、来る

なあああああ！！」

「アタシノアシナイノ。アナタノ、チヨウダイ？」

14

あの事件に関して、私が紅葉の為に出来る事がまだあった。入院した彼女を毎日見舞いに行く事だ。

これといった外傷はなかった。一週間近くの入院生活は恐らく、精神的ショックの払拭と栄養補給が目的であろう。私は本人指定の見舞いの品である、マツコのハンバーガーを美味しそうに頬張る紅葉を眺めながら、そう思った。

「病院だって、一日三食きちんと出るんじゃないのか？」

「食べた事無くても断言できるわ。精進料理の方が百倍は美味しいって」

四個目のハンバーガーに手を伸ばす紅葉が、自信たっぷりに言い放った。つまりは、美味しくないという事だろうか。

私はすっかり元気になった彼女を改めて目の当たりにして、読んでいた新聞をゴミ箱に放った。

その新聞の中には、法戸の死を報せる記事があった。足のない状態で死んでいたそうで、警察は島田殺害との関連性を調べている……との情報量のせいで、島田の時よりも枠が大きい。それが、島田よりも法戸の死が大きく扱われている様な気がして少し腹が立ったが、偉そうな事を言える立場ではない。線香すらあげてやってないのだし、何よりも私がメールを送らなければ、アイツは殺される事もなかったのだ。

ともあれ、きつと事件は迷宮入りするだろう。警察には、サっちゃんを捕まえる事は出来ない。

「……それにしても良く食べるなあ」

「そりゃ、六日も監禁されればね……埋め合わせしなきゃ体が可哀相でしょ？」

本人の口から、こうもアツケラカンと『監禁』なんて言うフレーズが飛び出して来るのだ。恐らく明日にでも退院出来るだろう。いや、して貰わなくては困る。切実な問題だ。そろそろ財布が底をつきそうなのだ。

「でも……あのメールだけで、よく犯人があいつだって分かったね？」

「ああ、それはさ……」

私は、六個目のハンバーガーを紙袋から取り出す紅葉に

簡単な推理を説明してやった。あの夜に、私が紅葉と同じ疑問を投げ掛けた時に鹿島さんがしてくれた推理を。

「君にメールを見せてもらった後輩は、こう言ったそうじゃないか?」でも、この最後の『助けて。お願い……』って文は、後から付け足されたものではよね」と……。だが、紅葉さんは他人には絶対にチェーンメールコレクションを見せないし送らないとも、その後輩は言っていた……。もう分かるだろう? オリジナルのメールを見た事の無い人間に、最後の一文が付け足されたものだという事が分かる筈がないだろう? それが分かるのは紅葉さん本人か、彼女にそのメールを送った人間だけじゃないか」

確かに。それは謙遜でも何でもなく、本当に簡単な推理であった。私は、どうして後輩……。つまり法戸が紅葉を誘拐したかについても鹿島さんに訊ねてみると、

「都市伝説に、その存在性というか偽りの信憑性を持たせるには、必ず犠牲者がいなくてはならない。友達の友達という、架空の他人がね。その存在が都市伝説を際限なく広げていく原動力になる。だが、法戸が怪奇同好会部長として目を付けて最初にメールを送った相手が悪かった。

チェーンメールを蒐集する趣味すらあった紅葉さんはきつと、数年前に広まった本物のサっちゃんメールを持っていたんだろっね。転送されないどころか偽モノであるという事がばれてしまえば、法戸の創り上げた言霊は、効力を発揮しない。そこで紅葉さんを誘拐して君に彼女の携帯でメールをし、サっちゃんに殺されたと思込ませ、メールを媒介させた。知人が実際に居なくなっているんだ。それは強力な原動力だったろっね……」

「 という訳で、法戸が犯人だと分かった訳……」

「す、すごい! ヘーちゃん、探偵みたいだね!」

探偵。

その単語がグサリと胸に突き刺さった。確かにこのまま黙っていれば自分一人の手柄になるのだが……。それじゃ、どうにも据わりが悪い。そう考えた私は、

「……だって、鹿島さんが言ってたんだ」

「鹿島……さん?」

途端、紅葉は口を空けたまま、ぼかんとした顔をする。

まるで、本当にお化けでも見た様な顔だ。

「ああ、紅葉は気絶していたから知らないのか……。実はさ、」

私はそう前置きをしてから、今回の事件の真相を白状した。

棚の中にあつた紅葉のレポートを勝手に見た事、それを手掛かりにして市立探偵事務所に助けを求めた事、法戸がチーンメールを媒介してサッチャンを創り出した事、自分のせいでサッチャんに殺されてしまった島田の事……。全てを白状した。

紅葉に全てを打ち明ける事で、全てを忘れてしまったかったのだ。鹿島さんの言葉を借りれば、忘却によつてサッチャン事件という過去を殺してしまいたかったのだ。しかし、

「どうしたんだ？ 顔色悪いぞ、紅葉」

「……。ねえ、ヘーちゃん……。こんな話、聞いた事ない？」

そう言つて、真つ青な顔をして紅葉は話をしてくれた。

一つは、あの棚の中にあつたレポートは彼女が書いたものではなかったという事である。字が似ているし、彼女の使っている机だからとすっかり潜在意識が働いてしまったが、あの棚の鍵は、前部長の頃からもずっと掛かつていた『開かずの棚』であつたのだそうだ。

鍵の主は前々代の部長で、その人は紅葉と同じ女性。髪が簾の様に長く、いつもマスクをしていて、気味悪がられていたという逸話があるとの事。

もう一つの話とは、都市伝説だった。そのタイトルは……。『市立探偵物語』。

結局、紅葉はきつちり二週間入院する事になった。最後の最後で、精神的ショックを受けてしまったからだ。そして私は……

15

今の彼女は、口元と一緒に狂気をも隠し果せていた。

だから誰も気付かない。彼女が、口裂け女と呼ばれる女の、その姉であるという事に。あの人以外、誰も気付かない。

口裂け女は三姉妹の末妹であるという内容も含み込んだ、「口裂け女」という都市伝説が広まったと同時に、彼女は

存在させられたのだ。

生まれついで罪を背負わされ、積み重ねる人生は罪そのもの……である筈であったのだ。だが、

「君は、存在させられた存在なんだよ」

彼は、鹿島零次はそんな彼女を救ってくれたのだった。

対抗神話として、都市伝説を殺す為の存在である筈の鹿島は、彼女に秘書という、口裂け女の姉という存在理由以外のそれを与えてくれたのだ。

私は口が耳まで裂けている。

私は百メートル三秒で走れる。

私は小梅ちゃんとベツコウ飴が好きだ。

私はポマードが嫌いだ。

私の名前は……それでも、十三階堂だ。

今、彼女がこうしてほんやりと立ち竦んでいるのも、秘書としての仕事の一つであった。ここでこうしていれば、その内に……

16

「おかしいな……たしか……ここら辺を曲がったと思ったのに……」

すっかり短くなったキャメルを啜えながら、藤堂はもう何度も巡って来た路地裏にまた帰ってきた。記憶だけを頼りに、一週間前に訪れた筈の市立探偵事務所を探す。だが、覚えていた筈なのに辿り着けないのだ。

「もしかして、十三階堂さんと一緒じゃないと行けないのか……？」

全てが分かった今となつては、それもあながち在り得ない話ではない。藤堂はチビた煙草を排水溝に投げ捨てると、新しい煙草を取り出して火を点す。

……と、

「そんな……仕掛けじゃ……ありません」

「うわあっ！」

突然、耳元で聞き覚えのある呟きが聞こえたかと思つと、すぐ横で十三階堂が肩を並べてこちらを見つめていた。藤堂は思わず口元から煙草を落としてしまった。

「ポイ捨ては……いけません」

「こ、これは、十三階堂さんが驚かすから……え？ その前のやつ……？もしかして十三階堂さん、ずっと俺の事を見てたんですか？」

半ば呆れながら訊くと、然もありませんと十二階堂は頷き、「それより……何か……用事でも？」

「え？」

「どうせ……全て……知っているのでしょうか？ 事務所に
は……都市伝説の……怪異に……遭わなきゃ……行けない
わ」

「え、ええ。紅葉から聞きましたよ。流石は怪奇同好会の
部長です。市立探偵という名の都市伝説の事もよく知って
いました」

「そう……なら」

嘆息してから、十三階堂は躊躇いがちに髪をかきあげ

「私が口裂け女だって事、所長が……カシマさんだって事
も知っていながら来たの……？」

顔のラインを覆う様に伸びる艶やかな黒髪の下には、耳
まで裂けた大きな口が隠れていた。今、藤堂は口裂け女と
対峙している。だが、

「知っています……それでも、来ました」

藤堂は目を逸らさずに答えた。

怖くない訳ではないが、今の彼女からは何処か優しさに
似たものすら感じてしまうから。初めて会った時とは、ま
るで逆だった。

「ふう……じゃあ……用事は？」

髪を下ろすと、口調もすっきり元に戻った。成る程、口
が大きく開かない様にする為に、小声で喋っていたのだと、
藤堂は今更ながらに納得した。

そう考えると、何処か可愛らしく思えてきてしまうのだ
から、人間の感情とは好い加減に出来ているものだ。

「お礼……ですよ」

「え……？」

「お礼、まだキッチンと言っていないませんでしたからね。先輩」

完

市立探偵事務所は都市伝説であり、実在の団体・人物・事件とは一切関係ありません……

『市立探偵物語』 南皆星達著

sakka.org